

北方民族の發展

北族の民族的自覺と文化の發達

南北朝以來隋唐時代にかけては、北方においては突厥、回鶻等トルコ族の全盛時代で、その勢は蒙古から廣く中央アジアに及び、南に向つては漢族に對して大なる壓迫を加へた。しかしながら彼等の漢族に對する壓迫は、要するに物資の奪掠を目的としたのに外ならぬのであつて、或る程度にこの欲望を充たし得れば満足し、その以上彼等の生活に適應しない塞内の土地や人民を自から占領支配するには至らなかつた。

中この有様は古代から不斷に認められる北方人の中國侵掠の態度と變りなく、そこに何等の變化も發展も認めることはできない。かゝる態度に出た北方人の考は、彼等の文化と漢人の文化との間には、種類にも程度にも相違があつて、到底互に順應し得ないものであるとなしたに外ならぬ。端的にいへば、棄て去ることを欲しない彼等の本地と生活とを維持しながら漢人を支配してゆく工夫を有しなかつたのであつて、これが爲に彼等の間にも勿論盛んであつた支配欲を、單に中國の饋與を貪ることにおいて満足せしめ、それが不満足の情態に置かれた時に常習の侵寇を演出したのである。

尤も五胡時代にも北人は漢土に入りて國を建て、北朝の魏の如きも北族の一種なる鮮卑種族の建設に係ることいふまでもないが、これ等は北人とはいひ乍ら、既に本地を去つて漢地に移り、その文化に育てられて、漢人と殆ん